

## 旧滝沢本陣

会津若松市



もてへの参勤交代や領内巡視、藩祖・保科正之を祭る土津神社への参拝時などに旅支度をするための休憩所として利用されていました。茅葺の屋根に覆われた建物は約330年前に建てられ、東北地方の民家としては最古のものとされていて国の重要文化財に指定されています。そのほか、藩主が愛用した日常品や参勤交代の道具、古文書なども公開されています。

**戊辰戦争時の会津藩大本営**

鶴ヶ城から北東に約3km、鶴ヶ城城下から白河を通り江戸へと続く旧白河街道沿い、滝沢峠の入り口に旧滝沢本陣はあります。本陣は、延宝年間（1673～1681）に滝沢組11カ村の郷頭を務めていた旧家・横山家に設けられ、江戸お

原・猪苗代の十六橋は戦略上重要な場所だったので藩主・松平容保は前線激励のため、ここに陣を構えました。白虎隊の士中二番隊に戸ノ口原へ出陣を命じた場所として有名です。

**会津藩の旧式銃 VS 新政府軍の新式銃**

母成峠での敗戦、十六橋が敵の手に落ちるなど会津藩の苦戦が続いた後、新政府軍は滝沢峠を越え城下に侵入。戦場となった滝沢本陣には今も砲弾や刀傷が10数ヶ所も残されていて、当時の戦いの激しさを感じることができます。



## じゅうろつきょう 十六橋の戦い

猪苗代町

は、すぐに十六橋へ前進しました。川村は鶴ヶ城の城下に入るには十六橋を渡らなければならず、破壊されれば水量の多いこの川は容易に渡れないことを知っていたのです。川村の部隊が到着した時、会津藩の奇勝隊が橋の破壊にとりかかつていましたが、強固な十六橋を落とせていませんでした。

その間に川村の部隊は奇勝隊に向かって一斉に発砲。奇勝隊も和銃やヤーダー銃で応戦しますが、相手のミニエー銃やスナイドル銃との力の差は歴然で、後退を余儀なくされます。こうして十六橋を突破した新政府軍は、戸ノ口原へと進軍したのでした。



## 戸ノ口原の戦い

会津若松市



藩境の母成口が破られたという知らせを受け、予備軍だった白虎隊も集合を命じられていました。藩主・松平容保のかたもり行く途中、戸ノ口原方面から応援を求められ白虎隊は戸ノ口原に向かうことになります。

この頃、十六橋の破壊が間に合はず、新政府軍は戸ノ口原になだれました。戸ノ口原の戦いは彼らの最後の戦いとなつたのです。

戸ノ口原の戦いは彼らの最後の戦いとなつたのです。

戸ノ口原の戦いは彼らの最後の戦いとなつたのです。

## 一ノ堰の戦い

会津若松市



**会津戊辰戦争の終盤**

八重の父はここで散る

一ノ堰は、会津での戊辰戦争終盤の激戦地で八重の父・山本権八もこの地で戦死しました。

会津藩の一ノ瀬要人らに率いられた部隊は、城南方面に転戦してきました。会津藩の有力部隊が鶴ヶ城の南に集結しているとは知らない新政府軍の諸隊は、城南の各村々を

占領して鶴ヶ城内への兵糧補給路を絶とうとします。両軍は鶴ヶ城の南数キロの所で遭遇し、戦闘が開始されました。

優勢・劣勢と立場を入れ替わり続け、両軍ほぼ互角のうちに日没。この日の戦いで会津軍は、主将の一ノ瀬要人をはじめとする隊長クラスの人物を多数失いました。有力幹部も負傷し、統率力や戦力に大きく影響しました。

新政府軍は一ノ堰に陣取っていました。会津軍をこのまま見過ごすことはせず、西側と北側から攻撃します。だが、両道から合流した新政府軍が戦闘隊形を取らないうちに反撃。会津軍は平地と山上から射撃し、新政府軍の前進を阻みます。逆襲には成功したものの、戦力に余裕がない会津軍はその日の夕刻のうちに大川を渡り、本郷方面に引き上げました。そして城下周辺の会津軍は一掃され兵糧補給路は遮断、鶴ヶ城は完全に包囲されたのです。



## 中野竹子殉節之地碑

会津若松市

**娘子軍を結成！**

自ら戦うことを志願し  
なぎなたを振るつた会津女子が散つた場所



江戸生まれ、江戸育ちながらも…

弘化4(1847)年3月、中野平内とこう子夫妻の長女として、江戸城和田倉門内の会津藩上屋敷内に生を受けました。幼いころから聰明で、さらに武芸にも通じていたといわれています。文武に優れた典型的な会津女子として、将来を期待されていました。

慶応3(1867)年、徳川慶喜が大政を奉還すると、会津藩は江戸にあつた屋敷を引き払い、その時緒に竹子も会津へ戻りました。そして問もなく、戊辰戦争が始まつたのです。

なぎなたを手に

鶴ヶ城城下に迫つた時のこと。中野竹子は母・こう子、妹・優子と共に、籠城しようと鶴ヶ城へと急ぎましたが、閉門されていて城内に入ることができませんでした。その時、竹子たちは岡村すま子、依田まさ子、菊子と出会います。彼女たちは行動を共にする女性だけの部隊を結成。後世に語り継がれる「娘子軍」の誕生です。

竹子たちは、藩主・松平容保の義姉である照姫が坂下宿に避難したという話を聞いて、その護衛部隊になろうと坂下へ向かいます。しかしそれは誤報でした。その後、竹子たちは坂下宿の法界寺で「晩過」として、再び照姫のいる鶴ヶ城へ向かつて出陣します。途中、城下西北の高久宿に駐留していた萱野権兵衛に、戦いへの参加を願い出ました。渋る権兵衛に「許されなければ自刃する」と粘り強く交渉し、旧幕府軍の衝峰隊と行動を共にすることになりました。

昭和13(1938)年、戦死した柳橋近くの湯川端に「中野竹子殉節之地碑」が建碑されました。碑の裏面には出陣の際になぎなたに結び付けてあつたという辞世の句

「武士の猛き心にくらぶれば  
数にも入らぬ我が身ながらも」

**なぎなたを手に  
勇敢に戦う竹子だつたが**

## 佐川官兵衛

会津若松市



会津

佐川官兵衛

平然と指揮を執つていたことから「鬼官兵衛」と恐れられました。戊辰戦争では各地を転戦し、材木町住吉河原での戦いでは、わずかな兵力で新政府軍に甚大な損害を与えました。これは籠城戦開始後、会津藩の挙げた唯一の勝利といわれています。

会津藩降伏後は、斗南へ移り苦しい生活を体験した後、会津に戻っています。その後、川路利良警視長に乞われ、官兵衛を慕う300名の旧藩士と共に警視庁に奉職。さらに、西南戦争が起ると二等大警部として出征し、熊本県阿蘇山中で戦死しました。

会津屈指の名将

剣術、馬術と歌道に秀でた文武両道の人でした。藩主・松平容保が日新館の学校奉行、容保が外出する際の警護にあたる別選組や諸生組の隊長を兼任。

鳥羽・伏見の戦いで、銃弾により眼を負傷したにもかかわらず、竹子は母・こう子、妹・優子と共に、籠城しようと鶴ヶ城へと急ぎましたが、閉門されていて城内に入るこ

とに親しみを持つて呼ばれた官兵衛。会津武士の精神を死ぬまで持ち続けた質実剛健で実直な彼の人柄は、いまも多くの人々から尊敬されています。

## 甲賀町口郭門跡

会津若松市

会津

甲賀町口郭門跡



新政府軍は、戊辰戦争における母成峠で勝利し藩境を破ると十六橋を突破、戸ノ口原の戦いも制します。滝沢峠を通り、一気に鶴ヶ城城下へと攻め込みました。この時、会津藩は国境の警備に力を入れており、城にはわずかな兵が残っているだけでした。城下に新政府軍が入ると、会津藩はすべての郭門を閉じて、守備隊を配置し応戦。城の北側にある甲賀町口郭門は、正門への道が続いていたため、新政府軍は真っ先に進んでいます。これを防ごうと、家老・田中土佐率いる守備隊は必死に自刃しました。

郭内に進入した新政府軍は城を攻撃しますが、郭内への進入を許しません。当時はここを境に、郭門の内側が侍の住む町（郭内）で、外側が町人の住む町とされていました。城への正門にあたる大手門として高石垣が築かれ、他の郭門よりも厳重な構えになっています。

城跡として国の指定を受けています。当時はここを境に、郭門の内側が侍の住む町（郭内）で、外側が町人の住む町とされていました。城への正門にあたる大手門として高石垣が築かれ、他の郭門よりも厳重な構えになっています。

## 鶴ヶ城籠城戦

会津若松市

### 会津の誇り・鶴ヶ城と運命を共に



会津若松市所蔵

#### 鶴ヶ城、開城

城内では、降伏についての議論が繰り広げられました。多くの者は城を枕に討ち死にに覚悟でしたが、心身の疲労は限界に達していました。そして無情にも人々の命が次々

殺されています。身の危険を省みずにはじめ、確実に職責を果たした会津魂を持った人々。彼らが鳴らす鐘の音は、会津各地の大きな心の支えだったに違ありません。

戦い続ける会津藩だつたが…

会津藩は自らの力や他藩からの応援によって戦況を好転できる望みが絶たれた後も、籠城を続けていま

した。会津の誇りである鶴ヶ城と運命を共にする覚悟だつたのでしようか、藩主を守り、城を保ち続ける限りは敗北ではないと考えていたのでしょうか…もしくは、その両方だつたのでしょうか。

しかしこの頃、既に会津は数万の軍勢に埋め尽くされていて、四面楚歌の状況でした。徳川御三家の尾張・紀州は新政府軍に寝返っていましたが、「外様」である仙台や米沢各藩が恭順論を台頭してくるのは当然のことでした。

会津から来る使者に、米沢藩は「もう援軍を出すのは無理だ」と伝えました。さらに米沢藩は、新政府軍から会津への攻撃を強要されようとしていて、1日でも早く開城してほしかったため、逆に降伏を勧めます。



平成23(2011)年、屋根瓦が戊辰戦争当時を再現した赤瓦へ

入城が間に合わず避難した者や自害に及んだ者、なぎなたの部隊を作り戦った者もいましたが、これ以外の者は降伏まで籠城しました。

八重はこの籠城戦において髪を切り、弟・三郎の袴を身にまとい、男丸に入るよう触が回っていました。火事鐘が打たれたら鶴ヶ城内・三ノ丸に入るよう触が回っていました。

籠城戦の始まり  
「かーんと半鐘がなつたら城内に入りませう」  
武家階級の家族には、あらかじめ火事鐘が打たれたら鶴ヶ城内・三ノ丸に入るよう触が回っていました。入城が間に合わず避難した者や自害に及んだ者、なぎなたの部隊を作り戦った者もいましたが、これ以外の者は降伏まで籠城しました。

八重はこの籠城戦において髪を切り、弟・三郎の袴を身にまとい、男丸に入るよう触が回っていました。火事鐘が打たれたら鶴ヶ城内・三ノ丸に入るよう触が回っていました。入城が間に合わず避難した者や自害に及んだ者、なぎなたの部隊を作り戦った者もいましたが、これ以外の者は降伏まで籠城しました。

籠城している子どもたちも「安全と危険」つまり「生と死」の見極めに慣れると、打ち込まれた弾丸を拾つて握り飯と交換してもらっています。これを大人たちが加工して再利用。間接的ながら子どもたちも共に戦っていたといえます。

籠城してある子どもたちも「安全と危険」つまり「生と死」の見極めに慣れると、打ち込まれた弾丸を拾つて握り飯と交換してもらっています。これを大人たちが加工して再利用。間接的ながら子どもたちも共に戦っていたといえます。

#### 鳴り止まない鐘の音

籠城の期間を通じて、城内の時を告げる鐘は正確に撞かれていました。新政府軍の攻撃で隣接する櫓が炎上しても撞き手はひるまず、死傷者が出ても交代して時を告げ

と奪われ、負傷者も増え続けています。これ以上犠牲を増やすことは、もはや責任ある行動とはいえず、容保はどうとう降伏を決断しました。鶴ヶ城は、新政府軍の砲撃で原型をとどめないほどに破壊されました。よくここまで持ちこたえたと、新政府軍が呆気に取られたほどです。鶴ヶ城の姿は見るも無残なものでした。しかし、同時に会津武士の意地と誇りの表れとなりました。

こうして、八重を含めた会津の人々の籠城戦は終わりを告げました。

## 会津戊辰戦争集結の地

# 会津藩無念の降伏 きあうけつせん

明治元（1868）年9月22日、会津藩降伏の白旗があげられました。この白旗は、城内の白布がすべて負傷者の包帯として使い尽くされてい

たため、開城前夜に婦女子たちが白布の断片をかき集めて作ったものといわれています。

緋毛氈を持ち帰ります。無念さを忘れないため家老・秋月悌次郎が小さく切つて渡したものだといわれており、それは後に「泣血氈」とよばれ会津の人々の心に深く刻まれました。降伏式が行われた場所は現在「会津酒造歴史館」になつており、館内の「会津名宝館」に泣血氈の実物が展示されています。



福島県立博物館蔵

そのままにされていた白虎隊士の  
亡き骸が最初に埋葬された場所  
日蓮宗の高僧・日什大正師の開  
基で、高弟の日仁上人が開山しま  
した。この地は日什大正師の父母の  
旧地で大正師が荼毘だひした場所。日  
蓮宗の聖地のひとつとされ、境内に  
は墓碑と伝わる五輪塔があります。  
会津を戦場とした戊辰戦争の終  
結後、藩主・松平容保父子が約1カ  
月の謹慎をした場所としても知ら



新潟県

# 河井継之助

長岡市

A black and white oval-framed portrait of a man with a shaved head, wearing a dark kimono with white piping on the shoulders. He has a serious expression and is looking directly at the camera.

長岡市立図書館蔵

文政10(1827)年1月1日、  
長岡藩(現在の新潟県)に生まれました。2度の遊学を経験し、26歳の時に山本覚馬と同じ、佐久間象彦の元で学んでいます。



希少な近代兵器だったガトリング砲(長岡市觀光課蔵)

浜通り

# 磐城平城 いわきたいらじょう

いわき市



弾痕のある良善寺山門。城主安藤家の墓もあります

慶長7（1602）年、島居忠政が  
10万石を与えられ磐城平藩を樹立。  
完成までに約12年の歳月をかけ、  
磐城平城を築きました。10数個あつ  
た櫓のうち、本丸の三階櫓が天守  
閣の代わりだったため、「磐城名物  
三階櫓龍のお濠に浮いて立つ」とう  
たわれ、別名「龍ヶ城」ともよばれま



## 主な参考文献

『シリーズ藩物語 会津藩』2005年  
著者:野口信一  
出版社:現代書館

『ハンサムに生きる 新島襄を語る(七)』2010年  
著者:本井 康博  
出版社:思文閣出版

『新島八重と夫、襄—会津・京都・同志社—』2011年  
著者:早川廣中・本井 康博  
出版社:思文閣出版

## 会津若松市史

『会津藩政の始まり 一保科正之から四代一』2001年  
『会津の幕末維新 一京都守護職から会津戦争一』2003年  
『会津の人物 一生きる、風土に育む精神性』2005年  
『会津の史的風景 一町、町並、街道を歩く一』2006年  
編集:会津若松市史研究会  
発行:会津若松市

## 編集後記

大河ドラマ「八重の桜」の放送が決まってから、さまざまな偶然が重なり、このブックの制作に携わることになりました。福島の魅力を広くPRできることを嬉しく思うとともに、このような機会を与えてくれた、すべての人に深く感謝しています。

(八重をもっと知り隊 根本)

今、福島に必要なこと、それは「積極的な行動」かもしれません。戊辰戦争や家族との死別、さらに故郷から離れるという苦難を乗り越えながらも、看護や女性教育に力を入れた新島八重から学びました。このブックが多く人のチカラになれば幸いです。

(八重をもっと知り隊 斎藤)

未知の世界へ敢然と、真っ先に飛び込む勇気を持続した新島八重。会津で生まれた彼女の生き方は、福島に生きる私たちに希望を与えてくれるはずです。私も、現状に満足せず、常に新しいことに挑戦する気持ちを持続していきたいと思います。

(八重をもっと知り隊 今井)

新島八重という女性を知っていくと、その魅力に心奪われます。大河ドラマの放映がこんなに楽しみだったことはありません。皆さんにも、この本で会津のこと・八重のことを予習していただき、「八重の桜」を120%楽しんでいただきたいと思います。

(八重をもっと知り隊 増子)

この事業で八重に関して取材しているうちに、どんどん彼女の魅力に惹きこまれていきました。また、たくさんの方にお世話になり、人と人のつながりの素晴らしさを改めて感じました。八重と同じ福島県に生まれたことをとても誇りに思います。ありがとうございます。(八重をもっと知り隊 鈴木)

「美德以為飾（見た目よりも心）」。晩年こんな書を残した新島八重。洗礼、洋装、男女平等。幾多の批判を受けるも、決してブレることなく「美德以為飾」を地で行きました。この冊子が、そんな「新島八重」を知るためのきっかけになってくれることを願って…。

(八重をもっと知り隊 本田)

# 福島県の「新島八重」マスコットキャラクター

# やえ 「八重たん」

日本全国から300件を  
超える応募があり、その中から  
「八重たん」は生まれました。  
これから「八重のふるさと・福島県」の  
魅力をどんどんPRしていきます。  
応援よろしくお願いします。



元気いっぱいに歩く  
八重たん



ピンクの髪の毛は、  
桜の花のようになっています

キャラクターの使用規程など、詳しくはホームページで。

[www.yae-mottoshiritai.jp](http://www.yae-mottoshiritai.jp)

八重の桜 福島県

検索